Title	大学の Integrity
Author(s)	小倉，義明
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume21, 2006.3 : 118-121
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3234
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

大学のIntegrity

第一コリント一二章四―一二節

小倉義明

〈一〉Text ―「からだ」のイメージ

○ 聖書は教会をキリストの〈からだ〉、ひとりひとりはその肢体、と言っている。

人間の共同体、更に言えば人間集団をからだと肢体といった有機体と見なすのは、遥かな理想である。けれども、理想であるが故に不可能であるとは聖書は言っていない。むしろそれを目指せ、と言う。即ち〈目標〉なのである。

○ 目標――。そこへの到達は不可能ではないにしても、容易ではない。いかにして接近できるか。

要件として、次の事を挙げることができよう。

目標が、集団の構成員に明示されていること

目標への接近の可能性と意味について構成員が理解を共有していること

—即ち、人間集団における「部分と全体」「多様性と一致」の問題である。

〈II〉大学の unity

○　大学は機能を異にする faculty の結合体である。各々の faculty の持つ機能は互いに相違しており、そこに多様性が現われ出るのは当然である。

けれども、学問と教育の機能は多様であっても、それらが奉仕する究極の目的と使命において、University の目指す目標は "unity" にあると言わなければならない。university は "unity" の目標へと引きあげられていないと、単なる diversity、分解・分裂となるであろう。こうした diversity と unity の問題について、聖書は多くの事例を知っており、深い洞察を加えている。その理解のために、私は integration というコンセプトを提示したい。

《integrate》

各部分の集合により全体になる

不備なものを完全にする

という含蓄である。

この含蓄は、極めて聖書的である。即ち各部分はそれ自体目的でなく自己完結的であり得ず、不備、不完全なものであって、それ故完全を憧れて、全体へと組みこまれてゆくことを求めている、という含蓄である。

○　聖書はレギオンという「悪霊につかれた者」をイエス・キリストが癒し給うたことを告げている。レギオンとは自己分裂状態、自己分裂のための狂操状態にある人間をさして言った。イエス・キリストは、この人を癒し給

うた。この男は「正気にかえった」とある。正気とは分裂が癒され、人格として統合されたことを言うのであろう。人格は、分裂したままでは人格になり難い。統合されているものこそ、人格であろう。人格的共同体は、その故に、integrationを要件とする。

〈Ⅲ〉大学のintegrity

○ integrationと同様の語にintegrityがある。誠実とか高潔の意。a man of integrity＝人格高潔の人。そうであればan university of integrityということもありうるであろう。品位や風格のある大学ということだ。大学にも品位とか風格とかがある。

○ ある女子学生が、その母親に言った。「ママ！その婦人は魅力あふれる人なの。いつも笑顔で、何でも皆と一緒にやるの。着ている服もセンスがいいし、スピーチをすれば美事なスピーチなの。言葉にも立ち居振舞いにもなんというか、風格や品位があるの。どうしたら、ああいうふうになれるかしら」

その娘の母親が答えた、「品位とか風格というものは、一朝一夕に身につくものでないのヨ。気品を身につける手っ取り早いノウ・ハウなどないけれど、貴女が憧れるような人の側にできるだけいることネ。そして真似ること、それが一番だワ」

○ 聖書は教会的共同体を有機体の結合にたとえた。そして、その結合は神に結びつくことからもたらされると言う。神が人間の有機的結合の可能根拠だと教えている。なぜなら、聖書で啓示される神は三一の神、三つにいましてひとりなる神であられるからだ。この三一の神に結びつくときに人間の集団におけるdiversityとunityが共

に生かされるのである。

ひとりの母親は娘に言って聞かせた、「そのような人の側にできるかぎりいること」と。同様に、私たちはこう言うであろう、「大学はできるかぎり神の側にいること」と。三一の神の側にいること、側にいて教わっていること、学んでいること、そのスピリットに与っていること――そこから大学の integration、ひいては integrity はもたらされるであろう。

〈結〉

○ この教職員研修会は既に二一回。毎年、ここでヴィジョンが示され、デシジョンが与えられ、アクションへと展開していった。大学形成の上で極めて意味深い実績を重ねてきており、これは数ある大学と比肩して誇るべき画期的な集会である。

この協議会の uniqueness は多彩にして多様な知性が、三一の神のみ側に寄り添う仕方で、知性が自己目的化することから解放されて、教育と研究の究極の目的と使命へと眼を上げている点にある。そこに、本学の品格 integrity が顕われている。

○ 本協議会は大学の究極の目的と使命へと自己を開いた知性が出会う、知的・精神的な祝祭 Fest である。従って、神へ捧げる Festschrift である。

愉しく意味深くこの二日間を過ごそう。そして Fest 祝祭にふさわしい Festschrift 祝賀論文集を神へと捧げようではないか。

（二〇〇五年一月、大学新年研修会　開会礼拝）